

# 磁器の限界を超えた、細かいシルエット。 山形から、新たな酒器の提案

矢萩 誉大 山形／陶芸家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催・LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェアラー家主催のチャリティーイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。



作品をプレゼンテーションする矢萩さん

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTA クリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登場し、想いを語った。19年秋ごろには、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを併せて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ば

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ば

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月24日プレゼンテーションにて

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

山形県選出の匠、陶芸家の矢萩誉大さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

### クールな外観 柔らかな触感

真っ白な磁器に銀彩を施した、雪のような表面が印象的なグラス。手に取ってみると、柔らかな感触と軽さが心地よい。スパークリングワインを注ぐと、きめ細かな泡が湧き上がる。凜としたたずまいは、大切な人との特別な時間を、すてきに演出してくれるに違いない。「スパークリングワインに限らず、ガラスとは異なる素



雪に囲まれる矢萩さんの工房

材の、飲み物を楽しむ器として広く使ってもらえればいいと思います。試行錯誤の末、このプロダクト「CLAYZEN（クレイズン）」をつくり上げた矢萩さんが語る。

名前は「土」を意味する「CLAY」と、形容詞として「凍った」を意味する「FROZEN」を融合させたもの。緊張感のある「寒さ」を、磁器の特性と細かいフォルムで表現している。「この地に生まれ育ち、制作活動を行っている私が、今考える『雪国』の空気感を盛り込むことができました」との言葉通り、雪の中から取り出してきたような感じだ。



白さが引き立つパッケージ

術工科大学と同大学院で学んだ後に制作活動に入った。最上川の近くにあるアトリエは、冬場は雪にすっぽり包まれる。冷えた朝には、空気中の水分が凍って朝日にキラキラ輝く。「CLAYZEN」のたたずまいを例えるならば、そんな感じだろうか。

完成までの道のりは、「磁器」という素材の限界に挑戦することでもあった。磁器は成形の時点できちんとした形ができていても、窯の中で焼くときにゆがんだり、変形したりしやすいため、フルート型のシャンパングラスのような細長い形状や、長いステム（脚部）をつくり上げるのが難しい。それゆえ、「磁器のシャンパングラス」はほとんど世の中に出回っていない。

エントリーの時点では「アイスクリームカップ」を想定していたが、キックオフ・セッションでのアドバイスを経て「シャンパングラス」に変更。昨年9月に行われたエリア・コンサルティングの時点の試作品は、ステムが短く、しかも傾いていた。どのような方法で美しいシルエットを出すか。転機はサポートメンバーの川又俊明氏との意見交換だった。

話の中で、さまざまなアイデアが出てきた。その中の一つを基に編み出したのが、「筒状の台に入れて焼く」方法。高い精度を出すことができ、ステムが曲がることを防ぐ。川又氏が「このかわりのパッケージ」だ。川又氏が特に強調した課題に対して出した答えは、黒のマット仕上げの箱に、黒のフェルトで包んで入れる、というもの。黒い箱を開けると、雪や氷のような質感のグラスが顔を出し、驚きを加味した演出だ。「焼いた後、窯を開けるときはとんでもなくわくわくします。真っ暗な窯の中に光が差し、白い器が顔を出す。そのときの感じも反映させたかった」。大学の同級生の協力も、大きな力となった。

プレゼンテーションの

### 「冷たい」緊張感をグラスに凝縮

手心えを感じている様子。川又氏からは「形を保つぎりぎりの、緊張感のあるフォルムが、圧倒的な存在感を見せている。試作段階よりも急激に成長したのが分かる」との評価を受けた。



エリア・コンサルティング

「これまでは、技術的な制約を理由に、自分の手に負える範囲で制作活動をしてきた。今回、技術的な困難を乗り越えて自分の表現したいものを形にすることができ、表現の幅を広げることがにつながった。新しいことに挑戦する大切さ、プロダクトを通して思いを伝える工夫の必要性を再認識できた」と語る矢萩さん。一連の過程を「新しいことが連鎖的に起きて面白かった」と振り返る。

「面白いこと」には、自分の表現活動に限らず、全国の匠たちと触れ合い、刺激し合ったことも含まれている。今回の成果を新たな飛躍のステップにしようと、精力的な活動に拍車がかかっている。



完成プロダクト「CLAYZEN」



スーパーバイザー  
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



作陶に取り組む矢萩さん



やまぎ たかひろ  
矢萩 誉大  
山形／陶芸家

高校時代に授業で陶芸を学び、県内の窯元で体験するなどして興味を持ったことがきっかけとなり、東北芸術工科大学、同大学院で専門的に陶芸を学ぶ。2014年12月に自宅の近くにアトリエを設け、主に食器や花器として使う磁器を制作、発表している。NPO法人職員や高校非常勤講師の仕事と並行して制作してきたが、17年より陶芸家一本で活動し、県内外のギャラリー、ショップ、飲食店で展示販売を行っている。

